

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十五)

津 守 真

輝く顔

五歳児の年長組になったAは、毎日、張り切って生活しているように思われた。幼稚園では友達たちの中にあわってよく遊んだ。家庭では、得意そうに笑い、よくしゃべり、兄妹たちの先に立って、一緒に長時間遊んだ。小さい子どもたちの間では、取ったりとられたり、泣いたり訴えたり、さわぎは絶えないけれども、子

どもが張りをもって楽しんで生活しているかどうかは、その中で共に生活しているおとなにはよく分るものである。五歳児の一期、私共はAの顔は輝いているような印象をもった。

ある子どもが張りを持って充実した生活をしているかどうかを、客観的な行動から説明することは甚だむづかしい。よく動きよく遊んでいるように見えても、それだけで、充実した生活をしていると判断することはできない。子どもが心から満足して生活しているときには、一見とりとめのない、まとまった形をもたな

い遊びである場合も多い。どんなことをしていようと、その行動から判断するのではなく、顔の輝きの印象から、子どもの内心の状態を見ることができるとも多いように思う。顔の輝きには、その子どもの内心の世界の全体が凝縮してあらわれており、

私共はその輝きに接して、その子が充実して生活していることを知るのである。それが何故であるかを具体的に説明することはむづかしい。言語や文章で説明するのは、時間を追って、空間の中でできごとを指示せねばならない。しかるに、充実した生活というのは内心のできごとであって、時間と空間を超えた世界に属することである。それだから、時間と空間の中にあらわれる行動

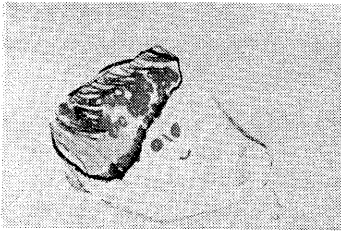
を記述するだけでなく、内心の世界をとらえる印象を助けとして述べねばならないのである。

五歳児のAが張りをもち満足して生活していたことは、このころの描画からも知ることができる。A 480（写真1）は頭につのかくしをかぶったおよめさんで、この以前には見られなかった手法の人物画である。この頃から始まって、頭を飾った人物画が次々に描かれる。A 481（写真2）は顔だけを描いた珍しいものである。頭に赤い球がたくさん飾ってある。A 505（写真3）も頭の上

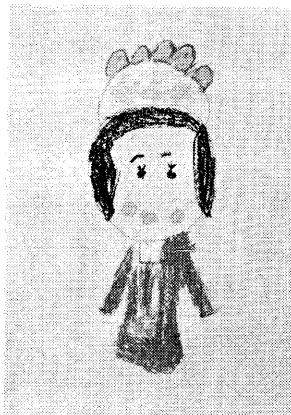
◀ 写真 1

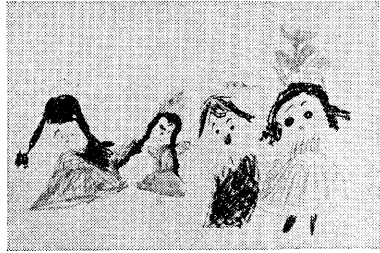


▲ 写真 2



◀ 写真 3





▲ 写 真 4

に赤と橙色と黄色で飾った冠をかぶっている。A 504（写真4）はクレヨンで描かれた四人の女の子であるが、それぞれ頭の上に美しい色の飾りをつけている。右端の女児の頭上には赤色の花に緑の葉の美しい花が載っている。Aはこれを時間をかけて描いたが、大変気に入って、この中で、どれが一番好きかと何度も私のところにはたずねて来た。ここにぬき出して示したのは、いずれも、五歳児の一学期の五月に家庭で描いたものである。ごく平凡な幼児の描画であるが、この子どもの描画の系列の中で見ると、色彩をつけた人物画であること、頭に美しい色の飾りをつけていると

いう特色をもっている。こうして時間をかけて人物を描き、頭に飾りをつけるとき、子どもは自分自身の像を描き、自分の頭を飾っていることと見ることができる。頭を飾るのは華やかな高揚した気分の時であり、これを描いている子どもの世界は、この絵のように輝いているのだと思う。

充実した生活をしていると思われるある日の遊びを次に記す。

5月3日

朝起きて、みんなねまきのまま遊びはじめる。

二歳六か月のYは、Aの持っている籠の中から赤いブロックを取る。

A「お兄ちゃまも、みんな今日はお休みだよ。ね、ごはんたべたら、何してあそぼうか。お店やさんごっこしようよね！」

こう云いながら、Aは割箸のピストルをいじっている。

四歳五か月のPは、だまって紙を折ったり、籠を頭にかぶったりしている。

Aは自分で着換えはじめる。

Yはブロックを重ねて、目にあて、「しゃんよ、これ」と言

う。

A 「お滑り台の上で、お店やさんごっこしようよね」

K (十歳) 「そこへあくまがくるんでしょ」

Y と P は何度云ってもきがえないで、ぐずぐずしている。P が Y の籠をとろうとすると、「ないの」と云って籠をおさえ、Y は P をひっかく。P は泣きそうになり、Y のスカートのひもをひっぱる。Y 「とっちやいや——」と泣き声になり、P の顔を引張る。P は泣き声を出す。

A 「ごはんですって」皆、食事にくる。

食後、A は室内滑り台の上に、ままごとの容器を運ぶ。

A 「だめよ——、そこお店やさんよ」

P 「それじゃ いっしょにお店やさんにならない？」

A 「あとでおしょうゆも売りにくるわ」

P は肉を買いにいつて帰ってくる。

A は滑り台の頂上に坐り、容器に水をいれて 土や葉をませ合わせている。

P 「バナナクリームの作り方おしえてあげましょうか」

P は「ジュースちょうだい」とA にもらいにゆく。A 「まだ開店してないの」 K 「どーれ、それじゃお兄ちゃまオレンジジュ

ース作ってあげる。」

P 「ジュースちょうだい」

A 「あのね あなた 洗ってくれなくちゃ」

P 「いいよ」と容器を洗いにゆき、もどってくる。

A 「まだ開店してないんだけど」

Y が滑り台の上からジュースのかんを持ってゆく。

A 「いやー、いやー、もってっちゃ」

Y はしっかりとぎってはなさない。

お店屋さん「ごっこしよう

A は朝起きたときから、今日はお店やさんごっこしようねーと云っている。遊びは始める前から、「いっしょに遊ぼう」と言っていて、後のことを心づもりし、楽しみにして待つのは、五歳児の年長組のころになって、特徴的なことのように思われる。こういう例を数えれば、直ちにいくつも挙げるができる。

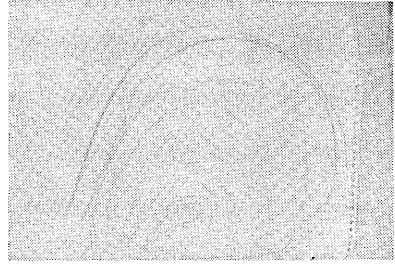
他の小さい子どもたちは、紙を折ったり、ブロックを目にあてて、写真と言ったりして、目の前にある物で遊んでいる。A も眼前にある割箸のピストルをいじっているが、心の中には、あとからやるつもりの方が位置を占めている。

Aは「お滑り台の上で、お店やさんごっこしようね」と重ねて言う。

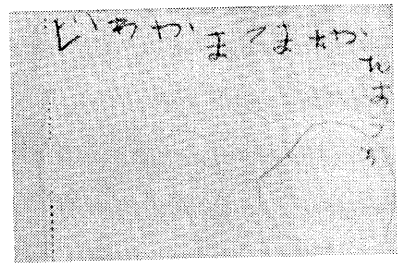
滑り台の上

滑り台の上は小さな空間である。ひとり坐ると一杯になる。また、他から簡単に侵入されない。その空間の中では、何かを自分で思うようにすることができる。

滑り台の上は、高い所の上方空間である。自分が高い所に上っ



▲ 写真 5



▲ 写真 6

て何かをするときには、他界を下方に見おろすことになり、高揚し、上昇した感じをもちやすい。子どもも高い所で遊ぶときは、高揚した気分を持つであろう。逆に言えば、高揚した気分の人に、高い所を選んで遊ぶと言えよう。打ちひしがれた感情にあるときには、子どもも、高いところで遊ばないことが多いのではないだろうか。

滑り台の上は、丘の上や山の上にも比せられる。子どもの中でも、力の強い者や優位にある者が、ままごとやおうちごっこでも滑り台の上の場所を占めるであろう。実際、Aについて言えば、

年齢の点でも、能力の点でも、また意欲においても、この場合のAは他の子どもたちよりも上位にある。滑り台の上に位置することとは、子どもたちの中で自然である。しかもなお面白いこと、この頃のAの描画を見ると、前に掲げた描画のように、華やかな頭飾りをつけた人物画と共に、上方とは逆のイメージのものもふくまれている。

四日後に描かれたA489(写真5)は、幾重にも重なる渦巻の洞穴である。同じころに、画用紙一杯に字をかく。「むかしむかしのおはなしをしましょう。それわ ほらあな くまちゃんのおはなしお いたしましょう」。その裏には、いろいろの大きさの円がいくつも描かれ、「いわやまくまちゃんおうち」と字が記される。(A491(写真6) A489の渦巻の重なりを並列させるとA491になる。穴の奥に次々に入ってゆくイメージは、子どもの描画にすると、A491のように並列した円となると考えられよう。

滑り台の上から下界を見下す高揚した気分は、一転して、地面の中にもぐりこむ下方に向うイメージとなる。相反する二つのイメージでは、心の世界の中で隣り合って同時に存在していると考えることができよう。坐りこんで、洞穴の奥の方を夢みる時があるからこそ、次には、高いところから他の子どもたちに向かってゆく時があるといえる。意図や意志をふくまない、子どもの自然な

遊びには、この両方がふくまれていて、あるときには一方があるときには他方があらわれるのであると考える。それが健康な子どもの遊びであろう。

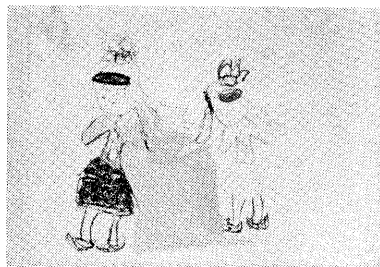
お店やさん

Aはままごが好きであるが、Aがここでしているのはままごとではなくて、お店やさんである。容器に水をいれて、土や木の葉をませ合わせているところはままごとと同じであるけれども、それは単独な作業ではなくて、他の子どもとの交渉を予想している。自分の活動に専念しているのだが、他の子どもとの交渉があることによって面白くなっているようである。子どもがお店やさんと名付ける遊びは、他の人との交渉をその中にふくんでいると言えよう。その交渉の仕方は、かならずしも、売手と買手という役割に判然と分化していなくともよい。お店やさんにおける人間関係を、そのように判然と分けて考えるのはおとなの考え方である。子どものお店やには、もっと自然で多様な人間同士の交渉がすべてふくまれている。

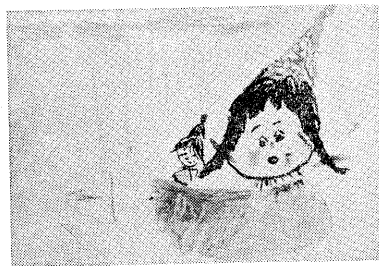
他の子どもとの交渉を内に含んだ遊びを積極的に選択するのは、五歳児の年長組の遊びのひとつの特色と言えると思う。幼稚

園での子どもの遊びを見ても、他の子どもとの交渉をたのしむ遊びが五歳児になると目立ってくる。

Aがこの時期に画いた描画は、頭飾りをつけた輝いた人物画であることを前に見たが、そのあるものは一つの画面に二人の人物を対にして描いている。A 487（写真7）は頭飾りをつけた二人の女の子であり、シンデレラと名付けられている。明らかにここでは二人の人物は対をなしている。A 488（写真8）は大きな女の子と小さな女の子が一つの舟に乗っている。二人とも三角の飾り帽子をかぶっており、大小の人物は対をなしている。大きい女の子



▲ 写 真 7



▲ 写 真 8

が自分で、小さい女の子が妹であると見ることができるともできるし、また、大きい女の子は小さい女の子から成長した自分自身と見ることがもできる。実際に他の子どもに対する関心があつて、一つの画面に二人の人物を描くと見ることができるともできるし、自分の内的世界の中に他人が位置を占めるようになったと見ることがもできる。いずれにしても、これらの描画は、他の子どもとの相互の交渉をふくむようになった子どもの世界を示すと言えよう。

ここに記したお店やごっこは、幼稚園でしばしば行なわれる、売買の社会認識や商品の製作などを中心とした整然としたお店や遊びとは比較にならないような、原始的でとりとめのないようにみえる遊びである。しかし、そのような遊びの中で、子どもは自らの世界の中の何物かを追求し、その顔は輝いているのであると思う。朝起きたときからお店やさんごっこをしようと言い、朝食が終るのを待って、直ちに滑り台の上で水を調合し、お店やを始める。そして他の子どもたちと交りながら、自分自身の活動をする。このような、いわば、ごたごたした遊びが幼児の遊びの本質をなすのであると思う。これをおとなの考えで整然と秩序立てたら、生活の輝きは失われてしまう。もちろん、ここにおとなも参加して、一層活気が出て面白くなることは沢山ある。けれども、おとなが整然と形づけようとする入り方をしたらどうであろうか。それを余りに性急なものとせずに、誘導保育として作り上げることができるとあると思う。それが成功するのは、ここで見たようなごたごたした遊びがその中にふくまれている場合であろう。そして、現代の都市の子どものように、家庭でごたごたした普通の遊びをする機会が少なくなっているときには、幼稚園や保育園では、整然とした遊びを作ろうとするのではなく、ごたご

たした普通の遊びをすることができるようになることが重要なのであると思う。とりとめのないように見えても、その中に子どもなりに意味を見出している時には、子どもの顔には輝きが見られるであろう。このことは幼児期に限らない。成長のひとつひとつの歩みの中に同じことが言えると思う。

(つづく)

